笛吹市探訪

第53回 笛吹市の史跡⑫ 御坂城

郡内地方と国中地方を隔てる御坂山塊（さんかい）は、古代から交通の難所でした。

御坂山塊を越えて甲斐国に向かう道は、御坂路（みさかじ）、若彦路（わかひこじ）、中道往還（おうかん）の3本がありました。これらの道は、都の進んだ文化や優秀な人材を甲斐国に運びましたが、有事の際には、軍隊が進攻する軍用道路にもなりました。

甲斐国を治めていた武田家が滅亡すると、織田信長の家臣、河尻秀隆が支配を任されます。しかし、その直後、本能寺の変が起こり、河尻秀隆は殺害されてしまいます。そして、北条氏と徳川家康による甲斐の国の奪い合いが起こり、天正10年（1582年）、両者は旧御坂峠付近で衝突します。

三ツ峠山から見た御坂城

天正10年7月8日、徳川家康は甲州制圧のため、中道往還を通って富士河口湖町精進に泊まり、翌9日には甲府に入ります。家康は、緊迫する戦局から、8月10日に躑躅ヶ崎（つつじがさき）館から新府城に移ります。北条氏は旧御坂峠に御坂城を造り、甲府盆地を窺（うかが）います。

天正10年8月12日、北条氏忠（うじただ）が旧御坂峠を越えると、鳥居元忠（とりいもとただ）らの軍勢がこれを迎え撃ち、御坂町黒駒で合戦となりました。合戦で、北条方は約300人が討ち取られたと伝わっています。武田家の旧領土を巡る両者の争いは、天正壬午（てんしょうじんご）の乱と呼ばれます。

甲斐の戦乱は、10月29日の講和をもって終結します。和平の条件には、上野沼田（現在の群馬県沼田市）の領有を北条氏に認める代わりに、信濃佐久郡と甲斐都留郡を徳川家康に割譲するとあり、これにより、徳川家康が甲斐、信濃をも支配することになりました。

藤野木集落から御坂路（鎌倉街道）の急な登坂を約1時間半歩くと、御坂城に到着します。御坂城は、甲府盆地と郡内地域を分断する旧御坂峠の尾根上にその姿をとどめています。東西約600メートル、南北約100メートルの細長い城で、土塁（どるい）と深さ数メートルの空堀（からぼり）により、旧御坂峠の尾根をふさぐような形に造られています。御坂城のように街道をふさぐように造られる例は、北条氏が築いた城にいくつか見ることができます。

この城には、土塁のほかにも甲府盆地側からの攻め上がりを防ぐさまざまな工夫が見られます。御坂町藤野木から旧御坂峠に向かう道は、ジグザグに造られていて、道を上から広く見通せるよう工夫がされています。また、峠手前には「子持ち石」と呼ばれる小石の山がありますが、これは、甲府盆地側から攻め上る徳川軍に対して用意した石つぶてを貯えたものではないかと考えられています。

御坂城跡地

徳川家康の甲斐支配により、御坂城はその役目を終えます。甲斐の安定とともに御坂城は次第に忘れ去られてきました。近年、土塁や空堀をはじめとする城の調査が行われ、旧御坂峠には城の範囲を示した表示板が設置されています。

今では、旧御坂峠は、富士山を望む景観スポットとして、また天下茶屋から黒岳、釈迦ヶ岳を結ぶハイキングコースとして知られ、多くの人々が訪れています。